

# 動詞結合「～teiku」の下位分類

—李(2014a)の下位分類との対照も兼ねて—

李 忠 奎\*

(e-mail : ch4229@hanmail.net)

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. 先行研究の概観
  3. 個別例の具体的な分析
  4. 動詞結合「～teiku」の下位分類
  5. 李(2014a)の下位分類との対照
  6. まとめ
- 

## 1. はじめに

日本語と韓国語には動詞と動詞が結合した「動詞結合」が数多く有り、これらの真相を究明するためには様々な観点からの綿密な考察が必要である。

その一環として、李(2014a)では「가다」を後項動詞(V2)とする介在要素有りタイプの動詞結合を対象にして、動詞結合間の連続性を認める下位分類を試みた。本稿はその続編として「行く」をV2とする同タイプの動詞結合を対象にして、以下の2点を取り上げる。

- (1)a. 動詞結合「～teiku<sup>1)</sup>」の下位分類
- b. (1a)の下位分類与李(2014a)の下位分類との対照

---

\* 西原大学校、助教授、対照言語学

1) 一般に、本動詞の場合は「(ご飯を)食べて行く」のように、補助動詞の場合は「(需要が)減っていく」のように表記するので、「～て行く」と「～ていく」を一括して表すために意図的に採用した便宜上の表記である。

李(2014a)と同じようなやり方で同タイプの日本語の例を下位分類しようとするのが(1a)であり、そこで得られた結果を李(2014a)の結果<sup>2)</sup>と対照しようとするのが(1b)である。(1a)を通して李(2014a)の試みが分析のアプローチとして妥当性のあることを検証し、(1b)を通しては両言語間に見られる共通点と相違点を明らかにする、というのが本稿の目的である。なお、李(2014a)と本稿は、1)ある動詞結合が「語」の一種である「複合動詞」の資格を有するかどうかの判断は決して容易ではない、2)それは「複合動詞」の厳密な定義が難しいためである、3)そうなのであれば、「語」の対立概念である「句」の様々な特徴を利用して、逆の視点から「複合動詞」を判別するのも一つの方法になるのではないか、という発想から出発したものである<sup>3)</sup>。

## 2. 先行研究の概観

動詞結合「～teiku」に関する分析が見られるものとしては、吉川(1968: 53～61、1976: 199～228、1989: 131～138)・寺村(1984: 162～163)・新美他(1987: 17～25)・森田他(1989: 306～310)・山田(2004: 140～142)・渡辺(2005: 25～43)・李美淑(2007: 99～114)・董素賢(2007: 247～264、2009: 39～58)・日本語記述文法研究会(2007: 42～45、2009: 130～133)・都基禎(2008: 47～62)・李宗和(2010: 129～148)・李廷玉(2011: 137～149、2013: 217～228)・이정옥(2014: 39～51)など数多くの研究があり、ここでは「アスペクト形式・アスペクト的意味」「空間移動・時間的推移」「並立的構成・複合的構成・補助的構成」「文法化」「韓国語との対応関係」「日本語教育」などのキーワードで表せるような様々な分析が行われている。どの研究にも学ぶ点が多いが、本稿の分析と関連して特に参考になるのは吉川(1968、1976)であり、また、研究の目的上、本稿の前編に当たる李(2014a、2014b)についても確認する必要があるので、以下、これらについて簡単に概観する。

### 2.1. 吉川(1968、1976)

吉川(1968)は「てくる、ていく」の補助動詞性について検討したものであり、そこでの要

2) より正確には李(2014b)の考察内容も加えた結果であるが、詳しくは次節で述べる。

3) 複合動詞の定義の一例として、森山(1988: 45)は「複合動詞とは形態的な定義の仕方である。すなわち、動詞が複数個集まって(音韻的に)全体として一つの動詞のような振る舞いをするものである」のように定義しているが、この中で「一つの動詞のような振る舞い」をどのように証明するのかが非常に難しい問題であり、この定義も完璧なものとは言えない。従って、本稿ではその定義は敢えてせずに、複合動詞は「語」であるという大前提のもとで「句」の特徴と一致しない特徴を多く有するものであればあるほど、複合動詞とみて問題ないという立場で分析を行うことにする。

点は表1のようにまとめられる(吉川1976:199<sup>4)</sup>)。なお、表1では「ていく」のみが挙げられるよう、引用者による若干の修正が加わっている。

【表1】吉川(1968、1976:199)の「ていく」の下位分類

	前の動詞の種類	意味の重点	語の挿入	前の動詞と「行く」との関係
A	一般の動詞	両方	可	互いに独立
B	移動を表わす動詞 (方向の概念なし)	行く	可	前の動詞が「行く」を修飾する
C	「もつ」の類の動詞	どちらとも言えない	可	前の動詞の結果で「行く」
D	移動を表わす動詞 (方向の概念あり)	前の動詞	不可	「いく」によって前の動詞が規定される
E	一般の動詞	前の動詞	不可	前の動詞にまつわる陰影を表わす

この結果は「ていく」とその前に来る動詞との緊密さにA、B、C、D、Eの5段階を認めたものであり、Aが一番ゆるやかで、Eの方へ行くにしたがって緊密になるものとしている。このように、動詞結合「～teiku」を一番緩やかなものから緊密なものまで段階的に分類したことは、以下、本稿の具体的な分析において大いに参考になる。

## 2.2. 李(2014a)

李(2014a)は、二つの動詞が単純に隣接しているだけのものと考えられる典型的な例、具体的には「철수는 학교에 아침밥을 먹고 갔다」における「먹고 가다」を対象にして、それが有する八つの統語上・意味上の特徴を取り出した。そして、それらの特徴を分析の基準とした上で個別例を考察し、各基準ごとに動詞結合間の一体化の程度を確認した。最後には「単純な隣接のものに見られる特徴と個別例が有する特徴との一致度」という観点から整理し、その結果に基づいた下位分類を試みて、一致度が低いものであればあるほど一体化が進行したものと見做した。

このような分析を通して、李(2014a)は「가다」をV2とする介在要素有りタイプの動詞結合は最も統語的なものから最も形態的なものまで連続的に分布する、という動詞結合間の連続性を認める分類を主な成果として提示した。

## 2.3. 李(2014b)

李(2014b)は、韓国語の {-고} 有りタイプの動詞結合を対象にして、李(2014a)の試みが他の動詞結合を対象にした場合にも有効であることを主張したものである。但し、李(2014b)は、李(2014a)において議論することができなかった他の基準も追加して、最終的には、①境界部の分離可能性、②V1・V2の副詞類による修飾可能性、③V1・V2の

4) 吉川(1968)は入手が困難であったため、その要点については吉川(1976:199)を参考にしたことを断っておく。

格支配能力の有無、④V1・V2の連体修飾化の可能性、⑤元の文への復元可能性、⑥V1・V2の否定可能性、⑦V1・V2の尊敬表現の可能性、⑧V1・V2は本来の意味か、⑨V1・V2はそれぞれ独立した別々の動作か、という九つの基準を採用している。ちなみに、李(2014b)が新しく追加したのは、⑦V1・V2の尊敬表現の可能性という基準であり、この基準も含めての李(2014a)の下位分類の結果は、日本語との対照がより分かりやすい形でできるように、5節で提示することにする。

### 3. 個別例の具体的な分析

本節では「行く」をV2とする介在要素有りタイプの動詞結合を対象にして、各基準ごとに個別例を分析する。議論の理解を助けるために、まず、二つの動詞が単純に隣接しているだけのもの、寺村(1984: 156)の言を借りれば「独立したコトの述語二つが並列的に結びついたもの」と考えられる典型的な例が持つ種々の特徴を確認しておこう。例として用いるのは李(2014a、2014b)で用いた「철수는 학교에 아침밥을 먹고 갔다」に対応するものとして適宜作例した「太郎は学校へ朝ご飯を食べて行った」という文である。

- (2) 太郎は学校へ朝ご飯を食べて急いで行った。
- (3) 太郎は学校へ朝ご飯を[急いで食べて][すぐ行った]。
- (4)a. 太郎が朝ご飯を食べた。(V1: 「が」格、「を」格)
  - b. 太郎が学校へ行った。(V2: 「が」格、「へ」格)
- (5) 朝ご飯を食べた太郎 / 学校へ行った太郎
- (6) 太郎が朝ご飯を食べた。 / 太郎が学校へ行った。
- (7)a. 太郎は学校へ朝ご飯を[食べずに]行った。(午前中お腹を空かせた)
  - b. 太郎は学校へ朝ご飯を食べて、[行かなかった]。(疲れたので家で休んだ)
- (8) 太郎先生は学校へ朝ご飯を召し上がって行きました。
- (9) 太郎は朝ご飯を食べた。 / 太郎は学校へ行った。
- (10) 太郎は学校へ朝ご飯を食べてから、行った。

(2)～(10)は、前述の①境界部の分離可能性(2)、②V1・V2の副詞類による修飾可能性(3)、③V1・V2の格支配能力の有無(4)、④V1・V2の連体修飾化の可能性(5)、⑤元の文への復元可能性(6)、⑥V1・V2の否定可能性(7)、⑦V1・V2の尊敬表現の可能性(8)、⑧V1・V2は本来の意味か(9)、⑨V1・V2はそれぞれ独立した別々の動作か(10)、という基準を適用して操作した文であり、その結果は表2のように整理することができる。なお、表の中の「①→(2)」は、①の基準に関しては例文(2)を見よという意味

であり、「可」は境界部の分離が可能であることの略である。

【表2】単純な隣接のものに見られる統語上・意味上の特徴

統語レベルの特徴							意味レベルの特徴	
①→(2)	②→(3)	③→(4)	④→(5)	⑤→(6)	⑥→(7)	⑦→(8)	⑧→(9)	⑨→(10)
可	両方可	両方有り	両方可	両方可	両方可	両方可	両方本義	2動作

以下の個別例の分析では、①～⑨の各基準ごとに表2の結果と一致しない特徴を有する例がより一体化が進行したものと見なされることになる。なお、以下の議論では、論を展開する過程において、必要により、韓国語との対照を行う場合がある。

### 3.1. 境界部の分離可能性

この基準からは、境界部の分離が可能なものとはそうではないものと大別できる。(11)の動詞結合は境界部の分離が可能であると判断した例である。

- (11)a. 彼は子どもと手をつないで行った。(→つないで歌いながら行った)
- b. 彼は角を曲がって行った。(朝鮮語<sup>5)</sup>) (→曲がってわざとゆっくり行った)
- c. 太郎は立てなくてトイレにも這って行った。(→這ってやっと思った)

これらに比べて、(12)の動詞結合は境界部の分離が難しいと判断したものである。ちなみに、(12)の例は、V2が主語の物理的な空間移動を表すものではないという点で(11)の例と対照的である。

- (12)a. 夫婦が仲良く遣って行く。(大辞泉) (→\*遣って仲良く行く)
- b. ボーナスが飛んで行った。(石井2010: 258) (→\*飛んで全部行った)
- c. 多くの高齢者が亡くなっていく。(→\*亡くなって次々といく)

結果的に、(11)の例は境界部の分離可能性という点で前述の「食べて行く」と共通し、(12)の例は共通しない。従って、この基準からでは、(11)の例より(12)の例の方がより一体化が進んでいると指摘することができる。ちなみに、境界部の分離は {ーは} などの一部の助詞による場合もあるが、以下の例文から確認できるように、同要素による分離は弁別的に機能しないと思われるので、本稿における境界部の分離可能性に関する操作

5) 引用する場合は、都合により若干の修正を加えることもあるが、そのことを一々明記することはしない。なお、本稿で挙げる全ての例文に対しては、日本語母語話者にその適格性をチェックしてもらったが、もし、同意しかねる箇所があれば、批判の形で指摘していただきたい。

は、副詞類(副詞・副詞形・副詞句)によるものに限定する。

- (13)a. 彼は子どもと手をつないでは行ったが、～  
b. その夫婦は最初は仲良く遣っては行ったけど、～

なお、一部の助詞による境界部の分離可能性と関連して検討を要することについては、李(2014b: 86～87)を参照されたい。

### 3.2. V1・V2の副詞類による修飾可能性

この基準からは、V1とV2のそれぞれを副詞類によって修飾可能なものとそうではないものに二分することができる。(14)～(16)の動詞結合は前者の例と考えられるものである。

- (14)a. 彼は子どもの手を[ぎゅっつないで]行った。  
b. 彼は子どもと手をつないで[歌いながら]行った。  
(15)a. 彼は角を[右に曲がって]行った。  
b. 彼は角を曲がって[わざとゆっくり]行った。  
(16)a. 太郎は立てなくてトイレにも[かろうじて這って]行った。  
b. 太郎は立てなくてトイレにも這って[やっ]と行った。

そして、(17)の動詞結合は後者の例と考えられるものである。

- (17)a. 夫婦が仲良く遣って[\*無難に行く/\*円満に行く]。  
b. ボーナスが飛んで[\*全部行った/\*あつという間に行った]。  
c. 多くの高齢者が亡くなって[\*次々といく/\*徐々にいく]。

(14)～(17)の例文は、意図的に(11)と(12)の例文を用いて操作したものであり、見て確認できるように、3.1.の操作と一部重複するところがある。(17)の例文が適格なものとして成立しないのは、V1とV2が別々の本動詞として機能するのではなく、動詞結合全体が一つの単位として機能するからであると考えられ、動詞結合の一体化の証拠として見ることができる。結論的にこの基準からでも(11)の例より(12)の例の方がより一体化が進んでいると言える。

### 3.3. V1・V2の格支配能力の有無

この基準から考察対象を分析すると、①格支配能力がV1・V2両方にある「Ⅰ類(VV型)」、②V1のみにある「Ⅱ類(Vv型)」、③V2のみにある「Ⅲ類(vV型)」、④V1・V2両方にない「Ⅳ類(vv型)」に四分することができる<sup>6)</sup>。まず、(18)の例は「Ⅰ類(VV

型)」に該当するものである。

- (18)a. 田中さんは現場に黒いバックを持って行った。  
 (→田中さんがバックを持った/田中さんが現場に行った)
- b. 渡り鳥が北の方へ飛んで行った。  
 (→渡り鳥が北の方へ飛んだ/渡り鳥が北の方へ行った)

括弧内の文を見れば、これらのV1とV2は名詞句との共起関係に問題がなく、各々格支配能力を備えていることが確認できる。これらと比べて、(19)の例は「Ⅱ類(Vv型)」と考えられるものである。括弧内のV2と名詞句の共起関係が適格なものとして成立しないことを確認されたい。

- (19)a. 強風でお気に入りの帽子が飛ばされて行った。(→\*帽子が行った)
- b. 大きな波紋が広がっていった。(→\*波紋がいった)
- c. ボーナスが飛んで行った。(=12b) (→\*ボーナスが行った)

また、(20)の例は「Ⅲ類(vV型)」であり、(21)の例は「Ⅳ類(vv型)」であると判断したものである。この場合、(20)における「に格」はV2が支配し、(21)における「が格」は動詞結合全体が支配すると分析する。

- (20) その夫婦は隣の喫茶店に好んで行った。  
 (→\*その夫婦が喫茶店に好んだ/その夫婦が喫茶店に行った)
- (21) 夫婦が仲良く遣って行く。(=12a) (→\*夫婦が遣る/\*夫婦が行く)

(18、19)の例のような「Ⅰ類(VV型)」「Ⅱ類(Vv型)」に属するものは数多く見られるのに対して、(20、21)の例のような「Ⅲ類(vV型)」「Ⅳ類(vv型)」に属するものは少なく、今まで調べた範囲では上記の例しか見つかっていない。結論的に、V1・V2の格支配能力の有無という基準からすると、(18)の例は前述の「食べて行く」と共通し、(19)～(21)の例は共通しない。従って、この基準からでは、(18)の例より(19)～(21)の例の方がより一体化が進んでいると指摘することができる。

### 3.4. V1・V2の連体修飾化の可能性

この基準は3.3.の基準と明らかに関係があり、ごく特殊な場合を除いては、3.3.での結果

6) 本稿における格支配分析は、原則として李(2014a、2014b)と同様に、寺村(1984: 167～171)と山本(1983、1984、1992)の分析を参考に行う。

と同一の結果が得られる<sup>7)</sup>。(22)は、(18a、19a、20、21)の例を利用して、V1・V2の連体修飾化の可能性を操作したものであるが、その成立可否は3.3.での結果と同一であることが確認できる。

- (22)a. バックを持った田中さん/現場に行った田中さん  
 b. 飛ばされた帽子/\*行った帽子  
 c. \*喫茶店に好んだ夫婦/喫茶店に行った夫婦  
 d. \*遑る夫婦/\*行く夫婦

従って、この基準からでも(18)の例より(19)～(21)の例の方がより一体化が進行していると言うことができる。

### 3.5. 元の文への復元可能性

(18)～(21)の括弧内のそれぞれの文を見ると、当該の基準も3.3.の基準と密接な関係のあることが分かり、殆どの場合、3.3.の基準と同一の結果が得られると考えてよいだろう。

- (23)a. その子は先生の方へ近づいて行った。(朝鮮語)  
 (→その子は先生の方へ近づいた/その子は先生の方へ行った)  
 b. 彼は学校に妹たちを連れて行った。(옛센스)  
 (→\*彼は妹たちを連れた/彼は学校に行った)

(23)の例は、5節で行う韓国語との対照のために、李(2014a: 289)の「다가가다」「데려가다」の対応形を意図的に挙げたものであるが、上記の「近づいて行く」と「連れて行く」も元の文への復元可能性という基準に限定して言えば、「다가가다」「데려가다」の場合と同様に、後者の方がより一体化が進んでいると言える。ちなみに、(23b)の「\*彼は妹たちを連れた」にアスタリスクを付けたのは、「連れていく」「連れて行く」の形で使われるのが普通であるという「連れる」の用法を参考にしており(小泉他1989: 340)、この「連れる」の用法が「데리고 있다」「데리고 가다, 데려가다」「\*나는 동생을 데렸다」のような「데리다」の用法と使用上における制限があるという点で類似することは興味深い<sup>8)</sup>。

7) 後続する(23b)の「彼は学校に妹たちを連れて行った」におけるV1は、「\*彼が妹たちを連れた」「妹たちを連れた彼」から確認できるように、格支配能力は有しないが、連体修飾化は可能であると考えられる。今まで調べた範囲では、3.3.の結果と3.4.の結果が異なる唯一の例である。なお、この「連れて行く」に関しては韓国語の「데려가다」「데리고 가다」と対照する形で、3.5.と5.2.2.1.で再び取り上げる。

8) 「犬を連れた彼女が立っていた」「\*개를 데린 그녀가 서 있었다」のように、連体修飾化の成立可否においては「連れる」と「데리다」の間に相違が見られる。



### 3.6. V1・V2の否定可能性

この基準から考察対象を分析すると、V1とV2両方をそれぞれ否定できるものとそうではないものとの大別することができる。後者の場合は、V1のみを否定できるものと動詞結合全体しか否定できないものを含める。

まず、(24a)の「着て行く」は、例の「食べて行く」と同様に、V1の否定もV2の否定も可能であると考えられるものである。

- (24)a. 純子はコンサートに浴衣を着て行った。  
 b. 純子はコンサートに浴衣を[着ずに]行ったよ。(普段着で行った)  
 c. 純子？コンサートね、浴衣着て、(結局)[行かなかったんだ]。

(24c)は、友達からの誘いもあり、コンサートに行くために浴衣を着ることは着たが、あまり気が進まず、また、急用も思い出したので、結局は行かなかったという状況を第三者が伝える発話である。(24b)の文と比べると、その状況をかなり細かく設定する必要があるが、適格なものとして成立する範囲内の文と考えられる。ちなみに、「純子はコンサートに浴衣を着て行かなかった」という文は、表面的にはV2のみを否定する文のように見えるが、「浴衣ではなく普段着を着てコンサートに行った」という解釈も可能であり、このような解釈では意味上V1と共に名詞句を否定することになる。このように否定文は否定の範囲がどこまで及ぶのかによって重義性を持ち(李他2004: 216~218)、この点が否定文の分析の難しさの原因になるが、今の議論では(24a)の動詞結合がV1の否定だけではなく、V2の否定も許容するという点が重要であり、これはV2が独立した一つの述語としての地位を獲得しているからこそ可能なことである。

(24a)の例と比べて、(25a)の例はV1のみの否定が可能なものと考えられる例である。ちなみに、(25)の文はwebで得た「このまま経済が成長せず税収が増えずにいくと、国債の利子と社会保障費の増大分だけ政府の赤字が膨張していきます」という文を参考にして操作したものである。

- (25)a. 税収が増えていく。  
 b. 税収が[増えずに]いく。  
 c. \*税収が増えて、[いかない]。

(25b)の文は、税収がもうこれ以上増えない状況になり、その状況が今後も続いていくという意味であり、V1のみの否定と解釈される。(24a)の例とは、V2が主語の物理的な空間移動を表すものではないという点で異なる。

上記の二つの例とはまた違って、(26a)の「降りて行く」は、V1の否定もV2の否定も難

しいと考えられるものである。

- (26)a. 私は野菜と果物を箆に入れて川原に降りて行った。(家族：81)  
 b. \*私は川原に[降りずに]行った。 / \*私は川原に降りて、[行かなかった]。  
 c. 私は川原に[降りて行かなかった]。

当該の動詞結合は、(26c)のような形で動詞結合全体の否定しか許容せず、「降りて行く」という動作自体をしなかったという解釈になる。

以上、紙面の都合上、三つの例を通して、V1・V2の否定可能性について見たが、この基準に従うと、(24a)の「着て行く」より(25a)の「増えていく」と(26a)の「降りて行く」の方がより一体化が進んでいると指摘できる。

### 3.7. V1・V2の尊敬表現の可能性

この基準から考察対象を分析すると、V1とV2両方をそれぞれ尊敬表現にできるものとそうではないものとに大別することができる。(27)の文は前者の例に該当するものである。「持つて行く」「飲んで行く」におけるV1・V2のそれぞれが尊敬表現になっていることを確認されたい。

- (27)a. 田中さんは現場に黒いバッグを[お持ちになって][行かれました]。  
 b. H様はゆっくりとコーヒーを[飲まれて][行かれました]。

これらに比べて、次の例はある一方のみの尊敬表現が難しいと判断したものである。

- (28)a. 原因は、このシリーズを[お読みになって]いくうちに分かると思います。  
 b. \*原因は、このシリーズを読んで[いかれる]うちに分かると思います。

(28)は「読んでいく」の例で操作を行ったものであるが、V2のみの尊敬表現は難しいと思われる。また、(29)は「好んで行く」の例で操作を行ったものであるが、この場合はV1のみの尊敬表現が難しいと思われる。

- (29)a. \*その夫婦は隣の喫茶店に[好まれて]行った。  
 b. その夫婦は隣の喫茶店に好んで[行かれました]。

ちなみに、両者の文を「原因は、このシリーズを[読んでいかれる]うちに分かると思います」「その夫婦は、隣の喫茶店に[好んで行かれました]」のように分析すると、「読んで

いく」「好んで行く」という動詞結合全体を尊敬表現にしたものとして解釈され、この場合は適格なものとして成立する。当該の基準では、V1・V2の尊敬表現がそれぞれ可能であるかどうかという点が重要であり、この基準からでは、(27)の例より(28)と(29)の例の方がより一体化が進んでいると指摘することができる。

### 3.8. V1・V2は本来の意味か

この基準からは、理論上、①V1・V2両方が本義であるもの、②V1のみが本義であるもの、③V2のみが本義であるもの、④V1・V2両方とも本義でないものに四分することができる。(30)はそれぞれの例に該当するものを順に示したものである。

- (30)a. 彼は学校に走って行った。  
 (→彼は学校に走った/彼は学校に行った)
- b. 彼女も彼からの愛を感じていく。  
 (→彼女も彼からの愛を感じる/\*彼女もいく)
- c. その夫婦は隣の喫茶店に好んで行った。(=20)  
 (→\*その夫婦は隣の喫茶店に好んだ/その夫婦は隣の喫茶店に行った)
- d. 夫婦が仲良く遣って行く。(=21)  
 (→\*夫婦が仲良く遣る/\*夫婦が仲良く行く)

(30a)の「走って行く」が本動詞同士の結合であることには説明を要しない。(30b)の「感じていく」の場合は、V2が主語の物理的な空間移動を表すものではないので本義とは言えず、この点は(30d)のV2にも当てはまる。(30d)の場合はV1の方も「子どもを大学へ遣る」「鳥に餌を遣る」「民宿を遣っている」(『大辞泉』)などのように他動詞として用いられる本義とは異なり、この「遣って行く」は、V1とV2を分解的に見るのではなく、動詞結合全体を〈行動や仕事やつき合いなどを続ける〉(『日本国語大辞典』)という意味を持つ一つの単位と見るべきであろう。一方、(30c)の場合はV1が本来の意味ではないと分析したが、この判断は「辛いものを好む、辛いものを好んで食べる」「推理小説を好む、推理小説を好んで読む」のように「を格」を取るのが「好む」の本来の使い方である、ということを参考にしてしている。ちなみに、(30c)の「その夫婦は隣の喫茶店に好んで行った」における「～に好んで」の形態は「辛いものを好んで食べる」などの本来の使い方から派生したものとして、機能的には「よく」または「しばしば」程度の意味をV2に添えるものと分析することができるだろう。この基準からでは、(30a)の例より(30b、c、d)の例の方がより一体化が進んでいると言うことができる。

### 3.9. V1・V2はそれぞれ独立した別々の動作か

この基準からは、V1・V2がそれぞれ独立した「別々の動作」と考えられるものとそうでないものとの二分することができる。なお、独立した別々の動作と解釈できるかどうかは「V1してから、V2」との置き換え可否によって判断する。なお、当該の置き換え可否の操作は、寺村(1984: 157, 162)を参考にした。

- (31)a. 山田君は学校に自転車に乗って行った。  
 b. 友達の家にはケーキを買って行くことにした。  
 c. 学校、休んで行った甲斐がありましたね。

(31)の例は、物理的な動作という観点から「(自転車に)乗ってから、(学校に)行く」「(ケーキを)買ってから、(家)に行く」「休んでから、(学校に)行く」という解釈が可能であり、いずれもV1「乗る、買う、休む」の各動作が一旦完了した後、V2の動作が開始されると考えられるものである。これらに比べて、(32)の例は「V1してから、V2」の解釈、即ち「\*(車を)走らせてから、(大田から)行く」「\*(灯が)消えてから、(どこかへ)いく」「(球が)転がってから、(三塁手の前に)行く」のような解釈にはならないものである。

- (32)a. 今回の旅行は大田から車を走らせて行くことにした。  
 b. 街の灯がだんだんと消えていく。(新美他1987: 24)  
 c. 球は三塁手の前に力なく転がって行った。(内山1997: 77)

これらは、意味上、動詞結合全体を一つの動作と見るべきものである。この基準からでは、(31)の例より(32)の例の方がより一体化が進んでいると指摘することができる。

## 4. 動詞結合「～teiku」の下位分類

以上、前節では「行く」をV2とする介在要素有りタイプの動詞結合を対象にして、李(2014a, 2014b)の考察を通して最終的に設けた①境界部の分離可能性、②V1・V2の副詞類による修飾可能性、③V1・V2の格支配能力の有無、④V1・V2の連体修飾化の可能性、⑤元の文への復元可能性、⑥V1・V2の否定可能性、⑦V1・V2の尊敬表現の可能性、⑧V1・V2は本来の意味か、⑨V1・V2はそれぞれ独立した別々の動作か、という九つの基準を利用して個別例を分析した。

前節の分析結果を参考に、**「単純な隣接のものに見られる特徴と個別例が有する**

特徴との一致度」という観点から、李(2014a、2014b)と同一の形で整理すると、表3のようにまとめることができる。九つの基準が設けられているので、一致度は9から0までの10段階に分類されている。なお、すぐ確認できるように、各動詞結合には下線を施しておく。

【表3】動詞結合「～teiku」の下位分類

	統語レベルの特徴							意味レベルの特徴		
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
統語的 ↑	太郎は学校へ朝ご飯を食べて行った。 / (11a)彼は子どもと手をつないで行った。 / (11b)彼は角を曲がって行った。 / (18a)田中さんは現場に黒いバックを持って行った。 / (24a)純子はコンサートに浴衣を着て行った。 / (27b)Hはゆっくりとコーヒーを飲んで行った。 / (31a)山田君は学校に自転車で乗って行った。 / (31b)友達の家にはケーキを買って行くことにした。 / (31c)学校、休んで行った甲斐がありましたね。							両方本義	2動作	9
可	両方可	両方可	両方可	両方可	両方可	両方可	両方可	両方可		
統語的 ↑	(11c)太郎は立てなくてトイレにも這って行った。 / (30a)彼は学校に走って行った。 / (32a)今回の旅行は大田から車を走らせて行くことにした。							両方本義	1動作	6
可	両方可	両方可	両方可	両方可	V2不可	V1不可	両方可	両方可		
統語的 ↑	(18b)渡り鳥が北の方へ飛んで行った。 / (23a)その子は先生の方へ近づいて行った。 / (32c)球は三塁手の前に力なく転がって行った。							両方本義	1動作	5
可	両方可	両方可	両方可	両方可	両方可	両方可	両方可	両方可		
統語的 ↑	(23b)彼は学校に妹たちを連れて行った。							両方本義	1動作	2
可	両方可	V1無し	両方可	V1不可	V2不可	両方可	両方可	両方可		
統語的 ↑	(20、30c)その夫婦は隣の喫茶店に好んで行った。							両方本義	1動作	1
可	V1不可	V1無し	V1不可	V1不可	両方可	V1不可	両方可	両方可		
統語的 ↑	(26a)私は野菜と果物を籠に入れて川原に降りて行った。							両方本義	1動作	0
不可	両方可	V1無し	V1不可	V1不可	両方可	V1不可	両方可	両方可		
統語的 ↑	(12c)多くの高齢者が亡くなっていく。 / (28a)原因は、このシリーズを読んでいくうちに分かると思います。							V2後退	1動作	0
不可	V2不可	V2無し	V2不可	V2不可	V2不可	V2不可	両方可	V2後退		
統語的 ↑	(25a)税収が増えていく。 / (30b)彼女も彼からの愛を感じていく。 / (32b)街の灯がだんだんと消えていく。							V2後退	1動作	0
不可	V2不可	V2無し	V2不可	V2不可	V2不可	両方可	V2後退	V2後退		
統語的 ↑	(12b、19c)ボーナスが飛んで行った。 / (19a)強風でお気に入りの帽子が飛ばされて行った。 / (19b)大きな波紋が広がっていった。							V2後退	1動作	0
不可	V2不可	V2無し	V2不可	V2不可	V2不可	両方可	V2後退	V2後退		
統語的 ↓	(12a、21、30d)夫婦が仲良く違って行く。							両方後退	1動作	0
形態的	不可	V2不可	両方無し	両方可	両方可	両方可	両方可	両方可		

このように整理してみると、動詞結合「～teiku」の個別例が有する統語上・意味上の特徴が確認でき、また、今回の調査では、一致度8・7・4・3に属する例を提示することができなかったものの、当該の動詞結合が一致度9の最も統語的なものから一致度0の最も形態的なものまで連続的に分布する、ということも把握することができる。一般的な用語を借り、統語的なものを2語扱いする「句」とし、形態的なものを1語扱いする「複合動詞」とすれば、一致度が低ければ低いほど複合動詞化が進んでおり、一致度0のものはもはや完全に1語の複合動詞と見てよいという指摘が可能になる。また、以下のような三つの指摘も本稿における重要なポイントになる。

まず、一般に「補助動詞結合」と呼ばれるもの、表3では一致度0に分布されている「増えていく、感じていく、消えていく」のようなものはVとV2が緊密に結ばれている形態的なものであり、位置づけとしては複合動詞の一種と見ることができる。

次に、(18b)の「飛んで行く」と(12b)の「飛んで行く」の例から確認できるように、同一の形態の動詞結合であっても格支配能力の有無に関する結果などが異なり得ることから、動詞結合に関しての分析は文脈を十分考慮した形で行うべきである。

最後に、李(2014a)の「가어가다, 뛰어가다」と同様に「這って行く、走って行く」のようなものは、1語としての特徴よりは2語としての特徴をより多く持っており、このような指摘は綿密な分析を通して可能なことから、動詞結合を下位分類する際はなるべく数多くの基準を適用した総合的な検討が必要である。

以上、動詞結合「~teiku」の下位分類を行い、それに関連する幾つかの指摘をしたが、表3と関わる以上の指摘は、李(2014a)の指摘と合致するものである。結論的に、考察対象を「行く」をV2とする介在要素有りタイプの動詞結合に限定した場合にも李(2014a)の試みは有効であると言うことができ、分析のアプローチとしてその妥当性を認めることができよう。

## 5. 李(2014a)の下位分類との対照

本節では、前節の下位分類を李(2014a)の下位分類と対照し、両言語間に見られる共通点と相違点を記述する。

### 5.1. 介在要素有りタイプ「~가다」の下位分類

李(2014b)で新しく追加した基準からの結果も含めて、李(2014a)の下位分類を提示すると、表4のようになる。

【表4】 介在要素有りタイプ「~가다」の下位分類

	統語レベルの特徴							意味レベルの特徴		
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
統語的 ↑	철수는 학교에 아침밥을 먹고 갔다. / 민호는 하룻밤 자고 갔다. 可 兩方可 兩方有り 兩方可 兩方可 兩方可 兩方可 兩方本義 2動作	9								
↑	그는 아이의 손을 잡고 갔다. / 영화는 학교에 스커트를 입고 갔다. / 찬호는 학교에 자전거를 타고 갔다. / 영화가 가방을 들고 간다. 可 兩方可 兩方有り 兩方可 兩方可 兩方可 V1不自然 兩方本義 2動作	8								
↑	영수가 경리과에서 퇴직금을 받아 갔다. / 그는 김문을 피해 일부러 옆길로 돌아갔다. / 제비가 처마 끝을 스쳐 갔다. 可 兩方可 兩方有り 兩方可 兩方可 兩方不可 V1不可 兩方本義 2動作	7								
↑	철수는 학교에 자동차를 몰고 갔다. / 그는 학교로 뛰어갔다. / 철새가 북쪽으로 날아갔다. / 아이가 기어간다. 可 兩方可 兩方有り 兩方可 兩方可 V2不可 V1不可 兩方本義 1動作	6								
↑	그들은 숲속에 들어갔다. / 희규가 그에게 다가갔다. / 관객들이 인기 배우에게 물려갔다. 不可 兩方不可 兩方有り 兩方可 兩方可 兩方不可 V1不可 兩方本義 1動作	4								

↓ 形態的	나는 동생을 학교에 데려갔다. 不可 兩方不可 V1無し V1不可 V1不可 兩方不可 兩方可 兩方本義 1動作	2
	철수는 서울로 올라갔다. / 우리 부부는 만화방에 즐겨갔다. / 그는 가족이 있는 곳으로 돌아갔다. / 아들이 지하실에 내려갔다. / 철수는 저녁을 먹고 영희네 집으로 건너갔다. 不可 兩方不可 V1無し V1不可 V1不可 兩方不可 V1不可 兩方本義 1動作	1
	철수는 나무에 올라갔다. / 그는 높은 계단을 올라갔다. 不可 兩方不可 V2無し V2不可 V2不可 兩方不可 V1不可 兩方本義 1動作	
	소가 죽어 간다. / 영희도 사랑을 느껴 간다. / 빛이 쌓여 갔다. / 비가 그쳐 간다. 不可 V2不可 V2無し V2不可 V2不可 V2不可 兩方不可 V2後退 1動作	
	바퀴가 돌아가다. / 도둑이 경찰에 잡혀갔다. 不可 兩方不可 V2無し V2不可 V2不可 兩方不可 V1不可 V2無し 1動作	0
	전 재산이 날아갔다. / 전깃불이 갑자기 나갔다. / 결국, 민호는 제 피에 넘어갔다. 不可 兩方不可 兩方無し 兩方不可 兩方不可 兩方不可 兩方無し 1動作	

以下、本稿の下位分類と李(2014a)の下位分類との間に見られる両言語間の共通点と相違点を述べる。

## 5.2. 両言語間に見られる共通点と相違点

### 5.2.1. 共通点

表3と表4の間に見られる主な共通点としては、1)「行く」と「가다」をV2とする介在要素有りタイプの動詞結合は、最も統語的なものから最も形態的なものまで連続的に分布する、2)一致度0に属されている「増えていく、感じていく」「쌓여 가다, 느껴 가다」のような、一般に「補助動詞結合」と呼ばれる例は形態的なものである。3)一致度6の「飛んで行く、날아가다」と一致度0の「飛んで行く、날아가다」から確認できるように、同一の形態の動詞結合であっても各例に見られる特徴は異なり得る、4)一致度6に分布されている「這って行く、走って行く、기어가다, 뛰어가다」のような例は、1語としての特徴よりは2語としての特徴をより多く保持している、などが挙げられる。四点とも既に李(2014a)と前節において指摘したものであり、特に、3)と4)の共通点と関連しては、両言語共に「文脈の重要性」と「数多くの基準を適用した総合的な検討」が分析上の注意すべきポイントになる。

### 5.2.2. 相違点

李(2014a)と本稿の考察を行う過程で両言語間に見られる相違点としては以下のようなものがあつた。対照言語学的に興味深い問題を含む幾つかの個別例を取り上げる。

#### 5.2.2.1. 「連れて行く」と「데려가다」

両者は、V1「連れる」と「데리다」が「\*彼は学校に妹たちを連れた」「\*나는 학교에 동생을 데렸다」のように、単独では述語として用いられないという共通点を持つ。結果的に、両方ともV1は格支配能力を有しないと分析することができる。しかし、V1を用い

て連体修飾化の操作を行った場合は、「学校に妹たちを連れてた彼」「\*학교에 동생을 데린 나」のようにその適格性において相違が見られる。また、両者は「彼、妹たちを連れて急いで行ってしまったの」「\*그 사람, 동생을 데려 서둘러 가 버렸어」から確認できるように、副詞類による境界部の分離可能性においても相違が指摘できる。この場合、「連れて行く」を「데려가다」ではなく「데리고 가다」に対応させると、「그 사람, 동생을 데리고 서둘러 가 버렸어」のように適格な文が成立し、境界部の分離可能性という基準に限定すれば、「連れて行く」の対応形としては「데려가다」より「데리고 가다」の方がより適切なものとなる。前述した通り、多くの場合、③V1・V2の格支配能力の有無という基準からの結果と、④V1・V2の連体修飾化の可能性という基準からの結果は同一になるが、当該の「連れて行く」の場合は、格支配能力のないV1が連体修飾化は可能であり、他の例と比べるとやや特殊な例になる。

#### 5.2.2.2. 「飛んで行く」と「날아가다」

両者は「渡り鳥が北の方へ飛んで行った」「칠새가 북쪽으로 날아갔다」のように、V1・V2共に物理的な空間移動を表す本来の意味として用いられるだけではなく、「ボーナスが飛んで行った」「보너스가 날아갔다」のように特殊化を伴った比喩的な意味としても用いられる。基本的に本来の意味と特殊化した意味があることは共通しているのである。しかし、意味の特殊化が生じた場合は「ボーナスが飛んだ」は適格に成立するのにに対して、「\*보너스가 날았다」は適格に成立しない、という違いが指摘できる。「飛んだボーナス」「\*난 보너스」のように連体修飾化した場合にも同様の違いが見られるが、これは「飛ぶ」と「날다」の守備範囲の違い、つまり、「飛ぶ」の〈あったものが消えてしまう〉(『大辞泉』)という意味が「날다」にはないという違いによるものである。「話があっちこっち飛ぶ、ヒューズが飛んだ、飛んだファッション」(石井2010:258)を「\*이야기가 여기저기 날다, \*퓨즈가 날았다, \*난 패션」とは言わず、「飛ぶ」の方が「날다」より意味の守備範囲が広いと言えるが、このような単独動詞としての意味用法が動詞結合の構成要素になった場合にもそのまま生かされ、結果的に「ボーナスが飛んで行った」と「보너스가 날아갔다」の間にV1の格支配能力の有無や連体修飾化の可能性などの基準において異なる結果が生じるのである。このような例は対照言語学的にも大変興味深く、動詞結合を対照分析する際は、その構成要素になる動詞の本来の意味用法を十分考慮する形で行うべきである、ということを端的に示すものであろう。

#### 5.2.2.3. 「好んで行く」と「즐거가다」

両者の間には、境界部の分離可能性という基準において相違が指摘できる。例えば、「好んで行く」の場合は「好んでよく行く」のような言い方が許容可能な範囲内のものであるのに対して、「즐거가다」の場合は「?즐거 자주 가다, \*즐거서 자주 가다」のよ



うな言い方は難しいように思われる。

- (33)a. 私も彼もそのお店を好んでよく行く。(web)  
 b. ?나도 그 사람도 그 가게를 즐겨 자주 간다.  
 c. \*나도 그 사람도 그 가게를 즐겨서 자주 간다.

V1「好む」と「즐기다」は両方とも「を格」名詞を取る他動詞であり、単独で用いられる場合は「夜釣りを好む、平穩な人生を好む、お酒を好む女性」「밤낚시를 즐기다, 평온한 인생을 즐기다, 술을 즐기는 여성」のような例から確認できるように、基本的には1:1の対応関係を示す。しかし、動詞結合のV1になって「好んで」と「즐겨」の形で用いられる場合には、その対応関係にズレが生じることになる。手元の辞書を参考にすると、「好んで」は『明鏡国語辞典』『岩波国語辞典』などのような小型の辞書にも見出し語として収録されているのに対して、「즐겨」は『표준국어대사전』のような大型辞書にも収録されておらず、その違いのポイントは「副詞としての地位を獲得しているかどうか」という点であることに気づく。辞書の記述を参考にすると、「好んで」は副詞としての地位を獲得しているとみてよいが、相対的に「즐겨」の方はまだそこまでの地位を獲得しておらず、その結果、(33)のような対応関係のズレが見られるようになると分析することができる。もし、この分析が妥当であるとすれば、「好んで行く」の場合は「副詞+動詞」のように分析しなければならず、すると、動詞結合として扱うのは適切ではないという問題がまた生じる。しかし、たとえ「好んで」を副詞として認めるとしても、それは「好む」から派生したものであるということは紛れもない事実であり、本来の動詞との関連性は否めないだろう。村木(1991: 41~44)は、「押し入る、打ち上げる、ひき合わせる、とり扱う、ぶち壊す、差し上げる、かき集める」などにおける「おし-、うち-、ひき-、とり-、ぶち-、さし-、かき-」のような例を取り上げ、語基とみるか、接辞とみるかという問題の難しさを指摘したが、当該の「好んで」を副詞とみるかどうかの問題も連続的な関係にあり、明確な線は引けないと思われる。(33a)の文を「나도 그 사람도 그 가게를 좋아해(서) 자주 간다」と対応させると、適格な文として成立し、この場合は「好む」と「좋아하다」、つまり、動詞対形容詞の対応関係になる、ということまで含めて考えると、当該の「好む」とその派生形の「好んで」は真剣な議論に値するものであろう。

以上、両言語間に見られる相違点として、対照言語学的に興味深い問題を含む三つの個別例を取り上げたが、全体的には「行く」をV2とする介在要素有りタイプの動詞結合は「가다」をV2とする同タイプの動詞結合に対応する場合が大半であるのに対して、逆に「가다」をV2とする介在要素有りタイプは「行く」をV2とする同タイプの動詞結合に対応しないものもかなりあるという相違点を指摘することができる。以下、表3と表4における一致度0の具体例から確認すると、日本語の例は以下のように大半が韓国語では「가다」を

V2とする同タイプに対応する。なお、紙面の都合上、動詞結合のみ提示する。

- (34)a. 亡くなっていく(죽어 가다)、読んでいく(읽어 가다)、増えていく(늘어 가다)、  
 感じていく(느껴 가다)、消えていく(꺼져 가다)、飛んで行く(날아가다)、飛ば  
 されて行く(날려가다)、広がっていく(퍼져 가다)  
 b. 遣って行く(\*해 가다、\*하고 가다→생활하다、지내다)

(12a)の「夫婦が仲良く遣って行く」の「遣って行く」は、逐語訳の「\*해 가다、\*하  
 고 가다」の対応形は適切ではなく、「생활하다、지내다」のような対応形が必要であ  
 るが、「살아가다」という対応形もあり、この場合は日本語と同タイプの動詞結合が対応  
 することになる。一方、韓国語の例は、日本語で「行く」をV2とする同タイプの動詞結合  
 に対応する場合もあれば、そうではない場合もかなり見られる。(35a)が前者の例であり、  
 (35b~d)が後者の例である。後者の場合、逐語訳の形では自然な日本語として認めるこ  
 とが難しく、その文脈に適切な他の形態が必要であることを確認されたい。

- (35)a. 죽어 가다(死んでいく)、느껴 가다(感じていく)、쌓여 가다(溜まっていく)、그  
 처 가다(止んでいく)、날아가다(飛んで行く)  
 b. 바퀴가 돌아가다.  
 (\*車輪が回って行く→車輪が回る、車輪が回転する)  
 c. 전깃불이 갑자기 나갔다.  
 (\*電気が急に出て行った→電気が急に消えた、急に停電した)  
 d. 결국, 민호는 제 꾀에 넘어갔다.  
 (\*結局、ミンホは自分の計略に自分が超えて行った→結局、ミンホは自分の計  
 略に自分がはまった)

(35b~d)の例の他に、「비용이 들어가다(\*費用が入って行く→費用がかかる)、부  
 장으로 올라가다(\*部長にあがって行く→部長に昇進する)、죽음으로 몰아가다(\*死に  
 追って行く→死に追いやる)、적어 물러가다(→敵が退く)」のような例も「行く」をV2とす  
 る同タイプの動詞結合に対応しない具体例として挙げることができる。

対応関係に見られる上記のような両言語間の相違点は、「行く」をV2とする介在要素  
 有りタイプの動詞結合は、文字通りの意味しか有しないものが殆どであるのに対して、「가  
 다」をV2とする同タイプの動詞結合は文字通りの意味だけではなく、比喩的な意味を有す  
 るものも多いことに起因する。このことは、例えば「食べる」と「먹다」をV2とする介在要  
 素有りタイプの動詞結合を対照にした場合にも当てはまり<sup>9)</sup>、「介在要素有りタイプの動詞

9) 日本語の「~て食べる」は殆どの場合、「~고 먹다、~어 먹다」の形態に対応するが、韓国語の「~어

結合全体を見た場合は、日本語より韓国語の方が多義語がより多い」と指摘することができる。これは、両言語の動詞結合の全体像を把握する上では示唆に富む指摘であるが、紙面の都合上、これ以上の詳細については別稿で改めて論じることとする。

## 6. まとめ

本稿は、「行く」をV2とする介在要素有りタイプの動詞結合を対象にしてその下位分類を行い、「가다」をV2とする同タイプの下位分類との間に見られる共通点と相違点を指摘したものである。その結果を簡単にまとめると、主な共通点としては、1)「行く」と「가다」をV2とする介在要素有りタイプの動詞結合は、最も統語的なものから最も形態的なものまで連続的に分布する、2)「(税収が)増えていく」「(빛이)쌓여 가다」のような一般に「補助動詞結合」と呼ばれる例は形態的なものである。3)「這って行く、走って行く」「기어 가다, 뛰어가다」のような例は、1語としての特徴よりは2語としての特徴をより多く保持している、のようなことを指摘した。また、主な相違点としては、個別例を取り挙げ、具体的には、1)「連れて行く」はV1を用いる連体修飾化が可能であるのに対して、それに対応する「데려가다」は同操作が難しい、2)意味の特殊化が見られる「ボーナスが飛んで行った」と「보너스가 날아갔다」の場合、前者はV1を用いる連体修飾化が可能であるのに対して、後者はそれが難しいことから、「飛ぶ」が「날다」より意味の守備範囲が広い、3)複数の辞書の記述を参考にすると、「好んで行く」における「好んで」は副詞としての地位を獲得していると見てよいが、それに対応する「즐겨가다」における「즐겨」は、まだそこまでの地位は獲得していない、ということも指摘した。また、対応関係のズレの要因として、4)「行く」をV2とする介在要素有りタイプの動詞結合は、文字通りの意味しか有しないものが殆どであるのに対して、「가다」をV2とする同タイプの動詞結合は文字通りの意味だけではなく、比喩的な意味を有するものも少なくない、ということも合わせて指摘した。

今後、考察の範囲をさらに広げ、他の個別例をも綿密に分析して、李(2014a, 2014b)と本稿の試みが分析のアプローチとして妥当性を持つことを引き続き検証していく予定である。

---

「먹다」の場合は「약속을 까먹다(約束を忘れる)、마음을 고쳐먹다(心を改める)、회사 돈을 떼어먹다(会社のお金を着服する)」のように「～て食べる」に対応しないものもかなりある。なお、李(2009: 188~212)は「食べる」と「먹다」をV2とする介在要素有りタイプの動詞結合を数多く挙げているので、参照されたい。

## 【参考文献】

- 이정옥(2014) 「「テイク」「テクル」와 「어 가다」「어 오다」의 문법화의 차이점」  
『일본근대학연구』 44, 한국일본근대학회, pp.39-51
- 李翊燮·李相億·蔡琬(2004) 『韓国語概説』大修館書店、pp.216-218
- 石井佐智子(2010) 「基本動詞「とぶ」の多義構造—比喩による意味拡張の観点から—」  
『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」  
活動報告書』Vol.平成21年度、お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム  
「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」事務局、pp.255-259
- 李廷玉(2011) 「〈変化の継続〉を表す「テイク」・「テクル」構文の前項動詞類について」  
『日本語教育研究』第21輯、韓国日語教育学会、pp.137-149
- (2013) 「主体の空間移動を表すテイク・テクルの連続性」 『日本語学研究』第38  
輯、韓国日本語学会、pp.217-228
- 李宗和(2010) 「日本語教育における「ていく・くる」について」 『日本語文学』第50輯、日  
本語文学会、pp.129-148
- 李忠奎(2009) 「日韓語の動詞結合に関する対照研究」北海道大学大学院文学研究科提  
出博士論文、pp.188-212
- (2014a) 「介在要素有りタイプの動詞結合の下位分類—「가다」をV2とする例を中心  
に—」 『동북아문화연구』第39輯、동북아시아문화학회、pp.277-297
- (2014b) 「{-고}有りタイプの動詞結合の下位分類」 『日本語文学』第62輯、韓  
国日本語文学会、pp.69-97
- 李美淑(2007) 「韓・日両語の対照研究の方法論再考—「してくる/いく」と「해 오다/가다」  
を例として—」 『日本語学研究』第20輯、韓国日本語学会、pp.99-114
- 内山政春(1997) 「現代朝鮮語における合成用言について—〈用言第Ⅲ語基+用言〉の分  
析—」 『朝鮮学報』第165輯、朝鮮学会、pp.39-114
- 小泉保·船城道雄·本田昴治·仁田義雄·塚本秀樹(1989) 『日本語基本動詞用法辞  
典』大修館書店、p.340
- 寺村秀夫(1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版、pp.156-163、167-171
- 都基禎(2008) 「日・韓両言語における「ていく」・「てくる」と「-가다/-ka-ta」・「-오  
다/-o-ta」の対照研究」 『仏教大学大学院紀要』第36号、仏教大学大学院、  
pp.47-62
- 董素賢(2007) 「「していく」の意味と用法について—文法化の観点から—」 『日語日文学  
研究』第63輯、韓国日語日文学会、pp.247-264
- (2009) 「「していく」のアスペクティブの意味の再考」 『日本言語文化』第15輯、韓国  
日本言語文化学会、pp.39-58

- 新美和昭・山浦洋一・宇津野登久子(1987)『外国人のための日本語例文・問題シリーズ  
4 複合動詞』荒竹出版、pp.17-25
- 日本語記述文法研究会(2007)『現代日本語文法』3、くろしお出版、pp.42-45  
—————(2009)『現代日本語文法』2、くろしお出版、pp.130-133
- 村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房、pp.41-44
- 森田良行・松木正恵(1989)『日本語表現文型』アルク、pp.306-310
- 森山卓郎(1988)「複合動詞について」『日本語動詞述語文の研究』明治書院、pp.45-55
- 山田敏弘(2004)『国語教師が知っておきたい日本語文法』くろしお出版、pp.140-142
- 山本清隆(1983)「複合語の構造とシンタクス」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究  
-5- 計算機用レキシコンのために-』情報処理振興事業協会、pp.315-380  
—————(1984)「複合動詞と格支配」『都大論究』21、東京都立大学国語国文学会、  
pp.32-49  
—————(1992)「第三部複合動詞辞典複合動詞結合情報付き動詞辞書作成の試み」『ソ  
フトウェア文書のための日本語処理の研究-11- 計算機用レキシコンのために(3)-』情  
報処理振興事業協会、pp.419-512
- 吉川武時(1968)「～てくる・～ていく」『日本語研究』pp.53-61  
—————(1976)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編『日本語動詞のアス  
ペクト』むぎ書房、pp.155-327  
—————(1989)『日本語文法入門』アルク、pp.131-138
- 渡辺誠治(2005)「「テイク/テクル」の分類をめぐって」現代日本文化学科編『活水論  
文集』48、活水女子大学・短期大学、pp.25-43

## 【辞書類・参考資料】

- 『岩波国語辞典』第六版(2000) 岩波書店
- 『옛센스 한일사전 전면개정판』(2006) 민중서림 (→옛센스)
- 『大辞泉』増補・新装版(1998) (<http://dic.yahoo.co.jp/>) 小学館
- 『朝鮮語辞典』(1993) 小学館 (→朝鮮語)
- 『日本国語大辞典』(2001) 小学館
- 『표준국어대사전』(<http://stdweb2.korean.go.kr/main.jsp>) 두산동아
- 『明鏡国語辞典』(2003) 大修館書店
- 柳美里(1997)『家族シネマ』講談社 (→家族)

## 要 旨

This research performed subclassification targeting 'verb combination of the type which has medium morpheme' of which consequent verb (V2) has '行く', then indicated the common ground and difference between Japanese and Korean through the comparison with verb combination of the same type which has 'go' in V2 within the result. The result can be briefly summarized as follows. 1)~3) are common grounds, 4)~7) are differences.

1) The relevant verb combination are distributed sequentially from the most syntactic example to the most morphological example.

2) The examples such as '増えていく、ssah-yeo gada' can be considered as a kind of the compound verb.

3) The examples such as '走って行く、dallyeo gada' hold more characteristics of the phrases (句) which treat with two words.

4) While '連れて行く' is available for adnominal modification using V1, however 'delyeogada' is not available.

5) In case of 'ボーナスが飛んで行った' and 'boneoseuga nal-agassda' which accompanies specialization of meaning, the former is available for adnominal modification using V1, while the latter is not available.

6) '好んで' of '好んで行く' has secured the position as the adverb, while 'jeulgyeo' of 'jeulgyeogada' still has not secured the position as the adverb.

7) Verb combination where V2 has '行く' mostly has the examples which have only literal meaning, while the verb combination where V2 has 'gada' has lots of examples which express metaphorical meaning besides literal meaning.

キーワード : verb combination, subclassification, compound verb, phrase, contrastive study

투 고 일 : 2015. 2. 28  
심 사 일 : 2015. 3. 14  
계 재 확 정 일 : 2015. 4. 4